

幼保連携型認定こども園の移行に伴う

保育者の専門性の変容（2）

○近藤 有紀子
(十文字学園女子大学)

栗原 啓祥
(認定こども園 清心幼稚園)

1. 研究目的

2017（平成29）年に、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が同時に改訂（定）され、2018（平成30）年より施行された。この中では、「3つの柱」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」が、幼稚園、保育所、認定こども園において、共通して行われるものとして記載された。その根底に流れるのは「質」でもあり、「質の向上」を求められている。

前回の発表において、筆者は新制度の移行後より参与観察を行ってきた幼保連携型認定こども園でのインタビュー分析から「幼保連携型認定こども園の課題と可能性（1）」として、保育者同士の関わりに焦点を当て、考察を行った。そこでは、一つひとつの課題を丁寧に対応していくことによって、徐々に保育者同士の連携がなされ、協働的に多様な生活形態の子ども達や保護者への対応が取れるようになっていった過程を明らかにした。また、連携を取り、課題を解消していくこと自体が、新たな課題を捉えるきっかけに繋がり、その繰り返しが幼保連携型認定こども園の教育・保育の質の向上に寄与しているのではないかと考察した。

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の第3幼保連携型認定こども園として特に配慮すべき事項においては、入園した年齢により集団生活の経験年数が異なる園児がいることに配慮することや、園児の一日の生活の連続性及びリズムの多様性に配慮するとともに保護者の生活形態を反映した園児の在園時間の長短、入園時期や登園日数の違いを踏まえ、園児一人一人の状況に応じていく等の記載がされている。前回の発表においても、生活形態の多様な子どもたちへの対応は予想以上に複雑であったことがインタビュー分析から見られた。矢藤ら（2017）は、認定こども園への移行に伴う保育者の専門性のあり方について、タイプ別（前身が幼稚園か保育所かなど）で分析をしており、幼保連携型認定こども園の3歳未満の保育においては、福澤ら（2017）がビデオ撮影から保育者の自己の振り返りなどで、PDCAサイクルへの思考のつながりを起こ

すといった研究がされている。幼稚園、保育所、認定こども園に問わず、保育者の専門性においては、様々な視点から研究されており、中坪（2011）は、Noddings（1984）のケアリングを用いながら、保育者の専門性としての感情的実践について、子どもとの関係や、保護者や同僚との関係における保育者の感情の重要性について検討している。また、田代（2017）は、子どもと相互的な関係にある保育者の専門性として、保育者が省察において子どもの眼差しをふり返ることと保育者が感覚的世界の身体を呼び覚ますこととの関係を、メルロ＝ポンティ（1964）を用いながら研究をしており、北野（2017）は、保育者による子育て支援や家庭との連携が、保育者の専門性としてどのように国内外で取り上げられているのかについて検討している。汐見（2010）は、子どもたちの社会性と保育者の専門性について、子どもへの期待の心理システムについて述べており、今後も、保育者の専門性については、常に検討される事項として挙げられるものと考えられる。しかしながら、新制度との関連した研究は少なく、継続的に検討されてきたものはほとんどない。

本研究では、「子ども・子育て支援新制度」の施行により、幼稚園から幼保連携型認定こども園へ移行時より、在職している保育教諭、B保育者に焦点を当て、移行当初から、4年目を迎えた現在までの実践の過程において、思考の変容を考察することを目的とする。その際に、A園は、幼保連携型認定こども園において、すべての認定の子どもたちが共に生活する施設とする。

2. 研究方法(対象と方法)

- (1) 対象：新制度施行と同時に、幼稚園から幼保連携型認定こども園へ移行したA園に勤務するB保育者（2歳児の担任）
- (2) 日時：2015年7月、2016年5月、2018年6月
- (3) 方法：移行後、4年のうち3回2歳児の担任をしているB保育者へのインタビュー調査を実施し、SCAT（大谷, 2007）において分析した。
- (4) 内容：SCATにおいて行ったインタビュー分析を

中心に参与観察での内容を加え、考察する。

3. 結果と考察

インタビュー分析と参与観察を基に考察をした結果、B保育者が、これまでの約4年の実践の過程において、幼保連携型認定こども園（以下、認定こども園）の制度に対する思考、保育者同士（同僚）に対する思考、保育（2歳児）に対する思考を主として行ってきたことが分かった。本稿では、移行前後の経過年数毎に考察することとする。

(1) 移行前から移行後1年目

移行前に8年の認可外保育施設の経験があったことから、1～2歳児が入ってくることに、その経験を生かしていこうとする心持が移行の際にはあった。そして、実際に2歳児の担任として保育をしていく中で、同じ年齢でも3号認定の子どもと子育て支援の子どもがおり、日々の人数が変わるなどの保育の多様な形態に対応する状況があった。一方で、1～5歳児まで年齢が広がったことによる子ども同士の関係の広がりや、周りの子ども達や保育者が見守る姿が見られ、年齢における「垣根のない環境」を感じ、2歳児の認定こども園での生活に「たくましさ」を実感していた。

(2) 移行後2年目

認定こども園に移行して2年目には、1年目と違う課題が出てきた。子どもの人数が増えたことにより、各認定の子どもが増え、育休を取得していた保育者が戻り、勤務の体制も多様になった。2年目の経験として対応できるところもあるが、1年目とは違う保育者同士の連携が求められ、そこに難しさを感じていた。移行した1年目は、手探りで頑張るというところから、2年目は1年目を踏まえた状況になるはずという思いと実際との違いから、話し合いの時間の捻出などを試行するが、なかなかうまくいかない。1年目で経験したことをうまく伝達したいという思いと、2年目に出てきた課題にも対応しなければならぬ状況に、保育者同士の連携の大切さを再確認している。一方で、2歳児の保育は2年目になり、1年目とは違う気付きや視点、悩みの変化とともに、認定こども園に2歳児がいる環境の面白さも感じている。1歳児、2歳児の育ちの過程が見え、これまでになかったつながりを感じる。

(3) 移行後4年目

認定こども園へ移行してから4年目になり、1歳から通園している子ども達が年中（4歳児）まで上がってきた。その様子を間近に見て、2歳児から一緒に園（幼稚園と同じ園舎）で生活する意義があると感じて

いる。その背景には、幼稚園から認定こども園へ移行したこともあり、（3歳）「未満児」「以上児」と括らずに、それぞれの年齢の育ちとして捉えられていることがある。保育者がそれぞれの年齢の育ちとして捉えられていることにより、2歳児の子ども達が、年少、年中、年長の子どもたちと自然と関われる環境がつけられ、時間の経過とともに年少、年中、年長の子ども達や担任に浸透し、受け入れられてきた。受け入れながらも、それぞれの学年の保育を大切に、担任同士で連携しながら、折り合いを付けることもしてきた。一方で、長時間保育の子どもたちの気持ちの安定（安心感の持続）について、保育者の勤務時間の変更（教育標準時間から長時間を跨ぐローテーションでの勤務）から気付いた点もあり、対応の必要性を感じている。試行が続く。子どもたちの関わりの中では、年長の子ども達は、認定こども園への移行時に2歳児クラスに在籍していた子どもでもあり、年長と2歳児の関わりの中に、相互に受ける影響を考えながら、育ちの連続性を実感している。

4. 総合考察

B保育者の実践の過程を通して見えてきたことは、断続的に発生している課題を常に前向きに捉え、試行錯誤している姿と、1歳から5歳までの子どもの年齢の広がりを、（3歳）「未満児」と「以上児」として括らずに、それぞれの年齢として捉えて、見守り、援助することによって、日々の保育が展開されており、それが育ちの連続性として、保育者が認識していることなのではないかと考えられる。

B保育者は、移行後4年のうち3回、2歳児の担任を経験してきた。これまでの幼稚園での3歳児（年少）～5歳児（年長）の生活と認定こども園での生活を、2歳児を中心とした視点から往還させながら、それぞれの1年を、子ども達と向き合ってきたのだと考えられる。その過程においては、様々な生活形態の多様さに日々対応しながらも、3歳児（年少）への育ちのつながりを見通しながら、子ども達の育ちに向き合うことの充実と、喜びや面白さを見出している。これらから、認定こども園において、多様さに対応しながら「よくしよう」とチャレンジし続ける姿こそが、保育者の専門性につながるのではないかと考える。

5. 引用文献

高橋 健介ら編著（2017）認定こども園における保育形態と保育の質。ななみ書房。